

『北越雪譜』の研究

馬琴が『北越雪譜』を出版できなかった事情

五十嵐 貞治

序

『北越雪譜』は越後の縮商人であった鈴木牧之が雪国の生活・風俗についてまとめた書である。鈴木牧之は自分でまとめた資料を出版しようと、山東京伝や曲亭馬琴などの著名人を頼っていた。その中で馬琴は、文化十五年（一八一八）に出版を牧之から依頼されたから、『八犬伝』、『玄同放言』等に牧之から送られてくる資料を載せたものの、十三年間出版することはできなかった。結局は天保二年（一八三一）に山東京伝の弟である山東京山の手に委ねられることになった。馬琴が十三年間も雪譜を出版できなかった理由については、現存する書簡から推察することができる。

例えば『北越雪譜』研究の第一人者である高橋実氏は「馬琴と越後雪譜」の第四章『玄同放言』と牧之の中で、次のように述べられている。

馬琴は、牧之の資料を大いに利用しようとしていたが、牧之を全面的に信用せず、常に不安を感じていた。これが「越後雪譜」の執筆にとりかかれなかった一つの理由にもなったのではあるまいか。

＊<sup>1</sup> 『北越雪譜の思想』 一二七頁

高橋氏は牧之の資料に対する不安が「一つの理由」であると述べられている。しかし私はそれこそが馬琴がなかなか雪譜を出版できなかった第一の原因ではないかと考えている。本論では、現存する書簡等をもとにその事情について考察していきたいと思う。

一 馬琴の小泉蒼軒宛書簡と牧之の資料

先に挙げた高橋氏の論は、馬琴から越後の小泉蒼軒に宛てた次の書簡をもとに述べられたものである。

放言江田代七ツかま加入いたし候様牧之子噂ニて御承知被成候処、七ツかま彼仁図し候は不宜候ニ付御尊父様より御写し可被下哉之旨忝奉存候。七ツかまは雪譜へ加入いたし候事ニて放言へハ加入いたし不申候。雪譜著述ニとりかゝり候節ハ何分真景ニ御図可被下候様奉願候。彼仁とかく龜忽の癖有之様ニ存られ候へハ、安心不致候。

放言へハ上州の両山の不二を加入れたし候。右両山ハリヤウヤマと唱候よし。これも牧之子仮名つけずに認被差越候故リヤウヤマヲフタヤマとかなつけ出板之上、右之非ヲ被申越、迷惑いたし候事ニ御座候。右の両山之図并銅堂及神前の掛鏡仏像等あら牧之より図して被差越候へとも牧之子か彼山へ登り候ニは無之、人の口より聞候を写し候へども、書中にハ牧之が登山せし趣にしてくれと内々被申越候。乍去地理ハ間違有之候てハ傍難通れかたく候故、其不安心ニ候。もし其御父子様右両山へ御登り被成候事も有之候歟。或ハ真景の写し御所持ニ候ハ、そのまゝ板下にいたさせ御名を後につたへ申度候。尤来早春までにて宜敷候。其外北越の海獸一ツハ海坊主の類一ツハ海類の類とて牧之子より図して被指越、并ニサトリ魚とて啄二有之魚ヲ図して被指越、何分放言江加入いたしくれ候様被申候ニ付、まづ取あへず惣目録に出しおき候へ共再考いたし候へハ、彼魚の図ともハ牧之子まのあたり見てその時写しおかれしにもあらず、後二人のいふがまにまに筆に任せて致図候物故、定テ間違可有之候。しかれハその図を著候てハ傍難脱かたく可有之哉、さばれ惣目録ニ出し置候故、今更除去り候事もいたしかたく候間、只その魚の噂をかるく書きあらハし候テ図ハ出し不申方可然哉と存候。もし右之魚の写真御所持ニ候ハ、御見せ被下候様奉願候。よしや御所持ニ無之とも御懸意中ニ取持之仁有之候ハ、御写しとり可被下候。外ニ写

真の図なきにおいては、右之魚之図ハ出板いたすましく存候。六足雷獸の図など誠に牧之子の爲にあらハし候へとも、図説とも追々ニ間違多く三度認被指越候へハ、三度まちがひ有之候。尤右雷獸ハ虚談を承知にてあらハし候へハしつれ二ても宜敷候へともさすかに地図など間違有之候てハ尤遺憾之事ニ候。

※<sup>2</sup>  
(越後小泉著軒宛馬琴書簡五通) 四三頁)

ここには、「七ツかま」「リョウヤマ」「海獸」「サトリ魚」「雷獸」の五つの資料について述べられている。ここで注目すべきことは、馬琴の「彼仁とかく龜忽の癖有之様ニ存られ候へハ、安心不致候」という言葉である。この記から馬琴は、牧之から送ってくる資料に大変不満を持っていたことが分かる。その直前にも、「七ツかま彼仁図し候は不宜候」と言っているし、その他にも「右之非ヲ被申越、迷惑いたし候事ニ御座候」「彼魚の図ともハ牧之子まのあたり見てその時写しおかれしにもあらず、後二人のいふがまにまに筆に任せて致図候物故、定テ間違可有之候」「図説とも追々ニ間違多く三度認被指越候へハ、三度まちがひ有之候」といった明らかに牧之から送られてくる資料に対する批判の言葉が見えるのである。

それに加えて、牧之の方からはいろいろと注文されていた。「リョウヤマ」については牧之自身が登って見てきたわけではないのに、「牧之が登

山せし趣にしてくれ」と言われ、「海獣」については「何分放言江加入いたしくれ候」と、是非『玄同放言』に載せるようにと言われていたのである。

このように馬琴に注文を付けてくる割には、その資料はいい加減なものであった。「リョウウヤマ」は振り仮名を付けずに送ってくるし、「リョウヤマ」「海獣」「雷獣」といった資料は牧之自身が直接見聞きしたものではなかった。そのため、不足、誤りが多かったのである。それで馬琴は、牧之の資料の表情を一々蒼軒に説明し、その度に、ほかに信頼できる資料があったらどうか見せていただきたい、とお願ひしているのである。

また、その他の書簡からも、馬琴が何度も牧之の間違ひを指摘していたという事実が分かつてくる。例えば『玄同放言』に載せられた雷獣の資料をめぐるやりとりである。馬琴は牧之から出版を依頼された初めの方で雷獣の資料を『玄同放言』に載せることを約束した。まず初めに本文の下書きを提示して見せた。しかし、牧之から送られてきた資料には、まだ不明な点が多く、未完の文章であった。そこで馬琴は「雷獣」についての考証を完璧にするために、牧之に次のような注文をしている。

右雷獣の事、年来たち候故おぼつかなく思召、用捨可致旨被仰下候へとも、頭の猪に似候事ハ大ニ考様有之に付加入仕候。乍去元禄年

中十二月下旬とは、あまりはつとしたる事にて、とかくかやうの物は年月日時をしかと書あらはし不申候てハ人信じ不申候。但し少々差略いたし、何年といふ処虫ばミニいたし候。もし何年と申事しれ申事ならハ、御正し被成可被下候。しれ不申候はば、右之通りにてよろしく候。〔鈴木牧之資料集〕 一三四頁

牧之は「年来たち候故おぼつかなく」と、雷獣の資料を送ってきた。そんな牧之に対して、馬琴は、雷獣が目撃された月日がいまいならば、見た人は信じないだろうと忠告している。また、それは雷獣だけに限らず、随筆ものを書くにあたって重要であるとも言っている。その上で、さらに詳細な内容を教えて欲しい、と牧之に要求しているのである。その後、この要求に対しての返事が、牧之からあったようである。その書は、今日見ることは出来ないが、その返事に応えたと思われる書簡が、文政元年五月十七日の牧之宛書簡で、馬琴は次のように書き記している。

雷獣の事先便及御答候処、尚又巨細に御しるし被成亦復今便玉湖老人御面并に雷獣の記等御とり揃おくり被下千万忝く奉存候。今少しはやく候はば致方も可有之候へ共、もはや右の板下は板元へわたし、既に此節はほり立申候、改るに不及、先便得貴意候趣にて出版可仕候

○十二月中の雪中が六月中ニなりてハ大ちがひに御座候。去ながら

これハ十二月にもせよ六月にもせよ、うそを承知にての事なれば、六月としても儘なる事とはいひがたし。まんざらなき事ニもあるまじけれど、玉湖老人とても御先祖の申つたひを聞給しよしなれば、たしかに覚られ候と申にもあるべからず。又原図を見れば、宝曆年中に写すとあり、元禄より宝曆までハとしもはるかに立たる事也。原図といふもその時にうしおけるものならねバ、証拠にハしかたし。それを伝聞て、玉湖老人の又うつされし物なれば、何とも心得かたく候。『鈴木牧之資料集』 一三九頁)

ここで馬琴は、「十二月中の雪中が六月中ニなりてハ大ちがひ」と、雷獣が出現した月が大きく変わっていることを指摘している。また、「元禄より宝曆までハとしもはるかに立たる事也」と元号の記述が違っていたと、これらの日付に関する事について少し強い調子で書き記している。そこには、『玄同放言』においては、年月日など些細な事についても完全なものにしたいということ、牧之に伝えようとする馬琴の思いが込められているのであろう。

だが、馬琴のもとに牧之の書簡が届いたころには時すでに遅く、「雷獣の事当月最初の御状にしれ不申、残念に奉存候」と書いている。すでに雷獣の草稿は板元に出していたのであり、手遅れのため月日については

改めないまま出版する、と牧之には伝えている。

馬琴は、完璧で詳細な考証を牧之に求めていた。年月日・出所など不明な点は、出来るだけ明確にすることが馬琴の信念であったのである。しかし、牧之から送られてくる資料には、あいまいで不明な箇所がそこかしこに見られた。雷獣が出現した時期については、「六月」か「十二月」かはつきりせず、しかも、それは玉湖老人からの又聞きで、その真偽も疑わしかったのである。

他にも馬琴が牧之に宛てた文政元年五月十七日の書簡でも、「雷蟬の事漢書に出たるよし、御しるし被遣候に付、漢書をくり候へ共見あたり不申候」とあり、やはり牧之から送られてくる資料の中には、いい加減な部分もあったことが分かる。馬琴資料の考証・訂正だけで、時間を費やし、執筆するどころではなかつたのである。

このように、牧之の資料には、不明な点や誤りがあったり、再調査が必要なおもがあつたりするため、その都度牧之への書簡を通して確認や要求をしている。それが繰り返しあつたと見え、先に挙げた小泉蒼軒宛書簡に見えるような直接的な批判になつてしまつたのである。その積み重ねが、馬琴から牧之の資料を遠ざけさせていたと考えられる。

## 二、『玄同放言』と馬琴

では、馬琴は他の本を出版するに際しても、そんなに厳密に誤り

等を直していたのであろうか。そこで『北越雪譜』と性質が類似している『玄同放言』出版に対する馬琴の取り組みを考察し、馬琴の出版に対する姿勢を見てみる。

『玄同放言』は六巻刊行する予定であったが、三巻分しか出版でできなかった。その理由については、馬琴自身次のように述べている。

拙著放言三集題事御尋被下、御書中之趣、承知候。かねても一寸申上候敷、右隨筆ものはとかく大ほね折レ、そのくせ書肆も利の為にハさまで歎び不申候。しかれども、書候て遣し候ハゞ、ほり立可申候へ共、何分隨筆にとりかゝり候ては腹合甚むづかしくなり、戯作ハ一筆も出来不申候。さて、右隨筆にそのとしをくらし候てハ、甚不經濟に御座候。且又、引書二ほしき書籍買ひ入レ候事も多く、彼是に損ありて益すけなく候へバ、不意ながら兩三年休ミ候て、八大伝、巡島記之兩編不殘あらハし終り、机上の手透になり候節、ゆるく放言の三編にとりかゝり可申候ト奉存候。夫迄命だに恙なく候ハゞ、著し置候目錄不殘全部いださせ候はんと存候。その間、いろく考候事も多く、とし久しく貯置候てハ後悔も少く候間、これハ出版ハ急ギ不申候。<sup>※4</sup>天理図書館善本叢書 馬琴書翰集』三頁 文政五年閏一月一日)

このように馬琴は、「書肆も利の為にハさまで歎び不申」と書肆にとつて儲からない書であることを述べ、「戯作ハ一筆も出来不申候」「甚不經濟に御座候」と読本等の執筆が滞っていることと経済的な利益がないことを理由に『玄同放言』出版を一時断念した。また、この後に「放言の噂ハいたすもの稀々に御座候」と言っていることから、多くの読者を得ることができなかったことも断念した理由であつたと思われる。また、馬琴は『玄同放言』を全巻出版できなかったことについて、小泉蒼軒宛書簡（文政七年閏八月七日）の中でも、次のように言っている。

放言御覽被成候よし、初編三冊のミと奉存候。次編三冊ハいまた御覽なく候哉。もし御覽も可被成候ハゞ、拙者所蔵の校合本貸進可致候。しかし、前後とも誤も有之、又あまりにいひ過して後悔致候事多く有之候間、まつ六冊切にて暫く筆を休め候。もし命あらハ又ゆるくと考著スべく奉存候。（越後小泉蒼軒宛馬琴書簡五通）五二頁

ここで馬琴は、『玄同放言』の続きに取り掛からない理由を、「前後とも誤も有之、又あまりにいひ過して後悔致候事多く有之候」と言い、出版することができた『玄同放言』に誤りや、不足が多かつたことを後悔している。このように馬琴は自分の作品についてもできるだけ誤り等をな

くすように心がけているのである。その姿勢で馬琴は雪譜に取り組もうとしていたのである。

ところで馬琴が『玄同放言』を著そうとした動機は、牧之宛書簡に「この隨筆は身後の爲」と記されているように、自分がこれまで集めて来た資料についての考証を子孫に残すためであった。また、次のようにも言っている。

これは不佞生涯の著述に存候に付、聊も煩勞を厭ひ不申、又売出しをも怠き不申何分校合に入念、四度目五度目及至六度も七度も直り候までは直させ候つもり

（『鈴木牧之資料集』 一五七頁 文政元年十二月十八日）

馬琴にとつて『玄同放言』は「不佞生涯の著述」であり、それで、<sup>※6</sup>「引書并考等極入念候」と考えていた。「四度目五度目及至六度も七度も直り候までは直させ候つもり」という記述から、『玄同放言』に懸ける馬琴の意気込みがひしひしと伝わってくる。この表現は、損得、苦勞を厭わず、後悔する作品にならないよう自分自身を戒めているようにもみえる。

しかし、そんな馬琴の意気込みもむなしく、出版された『玄同放言』には誤り、言い過ごしが多かったのである。そのことを悔やみ、残りの巻の執筆は休むことにすると著軒に打ち明けている。だが、ここで馬琴

は自分の事ばかりを反省しているのであるが、出版が遅れた裏には牧之の影響も少なからずあるのではないだろうか。先に述べてきたように、牧之から送られてくる資料は、馬琴にとつて未知の土地の資料であり、それに加えて、牧之の資料には不明、不足の点が多かったのである。そのような資料を、牧之と書簡のやり取りをしながらか手直ししていくことは、自分の手元の資料を直すよりも手間がかかったはずである。

### 三、馬琴の姿勢

馬琴は、牧之から送られてくる資料を出版するに際して、次のような内容を牧之に書き送っている。

文章にとり直し認候はば、さのみむつかしき事にはあらねど、かくてはよのつねの俗書なれば、末代まで世にのこらん事あるべからず。さてこれを和漢の書に引当て、故事故実古伝古歌等を考あはせんには、容易なる著述にあらず。

（『鈴木牧之資料集』 一三七頁 文政元年二月晦日）

牧之からの資料をそのまま文章にして本にしてしまえば、簡単に出版はできる。しかし、それでは、人並みの「俗書」としかならず、その時限

りの「末代まで世にのこ」るような書にはならない。人々の目をひく、長い間人々に読まれる書にするためには、やはり「和漢の書に引当て」ることが重要であった。出版するからには、きちんと裏付けのある書に仕上げたかったのである。

しかも、それは、牧之の方でも納得していたことである。

雪中の事も和漢の故事等、くさく引つけ著述可致と思召候よし承知仕候。乍去右の書は、随筆などちがひ、俗へちかき物に候へば、ひとつくに故事を引、漢文などをさし加へ候はば、兎捌の障りになり可申やの斟酌も有之候。いづれにも其著述の節を見斗ひに可仕候。(『鈴木牧之資料集』 一四八頁 文政元年七月三十日)

このように、牧之の方でも和漢の書を引き、末代に残る書を作ろうとする馬琴の考えに賛同していた。逆に馬琴の方では、牧之の考えを聞き、承知したのであるが、雪譜の場合、あまり専門的になると「兎捌の障り」ともう少し考えて見る必要があるとも言っている。馬琴は「十分の内七分は俗三分は雅といふものは、いつもうれ申候。十分の内七分雅三分は俗といふものは多くうれ不申候。随筆などこれ也」と牧之に教授していた。『玄同放言』の場合は完全に随筆であるので、いくら考証事を入れても構わないが、雪譜の場合は少し種類の異なった書であるので、

慎重に考えなければならぬのであった。

また、たとえ、多くの書を引くことにしても、様々な問題がある次のように言っている。

乍去引書に乏しく候へば、追々よほどの書籍買入れ不申候ては、事ととのひまじくと奉存候。古人京伝子難波被申終に著述せざり候は、これらの故なるべしと存られ候。乍去澁を乗課せ候はば、外に類なき新書なれば、永く不朽に伝り可申候。随分ほねをり候ても、骨折がひあるべく又一つはその書のつづり方にもよるべし。これ大業也。

中々容易の事にあらす。(『鈴木牧之資料集』 一四二頁)

書物に当たるためには、多くの費用がかかる。京伝もそれが原因で、雪譜の著述をしなかつたのであるうと馬琴は推測している。だが、出費を惜しまず、引書に考証に骨を折つたならば、「外に類なき新書なれば、永く不朽に伝」わる本になるであろうと言っているのである。やはり、馬琴は雪譜を、多くの人に読まれ後世に残るような本になるためには随筆と同じくらい書を引き、完璧にすることが必要であると思っていたことが分かる。そんな馬琴の信念から資料の一つ一つに綿密な考証をしなければならなかつたために、十数年という月日が経つていても、雪譜著述に手をつけることができなかつたと考えられる。

また、綿密な考証の理由について、馬琴が次のように言及している箇所が見られる。

去りながら奇観なりとて、人のいふままをうけり書しし候へば、人のうそわがうそになり申候。出所とくに御糺し可然と存候。此書の雷獣などは、一体雷魚雷鷄等の考有之、その上、雷獣の考の末へ加入仕候事故、たとへ根なし事なりとも、此事のみにあらねば所言絵そらごとにて、さのみ人のとがむる事も有之まじく候。その事のみをしるし候においては、浮きたる事はむざとあらはしがたく候。

京都騎人伝の作者は、正直なる人にて、人のいふて聞するまゝをみな実事として、それを多く書あらはし候故、まちがひ多く、識者の為に笑れ申候。此処御心得可被下候。仮初こころ得肝要也。甚失礼なる申条なれども愚意如此に御座候。

『鈴木牧之資料集』 一四〇頁 文政元年五月十七日

ここで「奇観」とは馬琴が考えていた『北越雪譜』の当時の段階での名前である。人の嘘を受け売りにし、その嘘のまま書き記したのでは、著者の責任となり、批判を受けることとなってしまう。よつて、もし根拠がない奇事があったならば、詳しく考証し、間違いを少なくするべきだ、ということ「甚失礼なる申条なれども」と、敬意を示しながら馬琴は

牧之に説いているのである。人の噂をそのまま人の目に入れることは、馬琴にとつて許せないことであり、これからのためにも、この事はどうしても牧之に伝えておきたかったことなのであろう。他の部分では、「<sup>※</sup>わからぬ事ならば、そのまゝにてもくるしからず候へ共、愆にはわきより批をうたれぬやうに、ひしくとくわしく仕度候」とも言っている。やはり、人々から非難されない完璧な書を書くことができるような資料を牧之に求めているのである。

#### 四、蒼軒から送られてくる資料の信頼性

ところで馬琴が頼りにしていた小泉蒼軒から送られてくる資料はどのくらい信頼できるものだったのだろうか。

小泉蒼軒は牧之と同じく越後の人物である。小泉蒼軒の父其明は、『越後全図』『越後の道しるべ』などを著した地理学者であり、蒼軒も父の志を継ぎ、『越後里程誌』『越佐地名表』『風俗問状』などの著書を書いている。蒼軒は、考証家としての馬琴への弟子入りを希望しており、牧之の紹介によつて、馬琴と知り合い、文通をしていた。その時の書簡が現在五通残されており、北越雪譜研究の第一人者である高橋実氏によつて、近世文芸に発表されている。その書簡の中で馬琴は牧之に雪譜出版を依頼された経緯を説明した上で、「雪譜に入用品々御心付被成候分ハ、御資ヶ被下候様奉願候」と、雪譜のために必要な資料を要求している。



小泉其明の書いた越後地図は、馬琴の牧之宛書簡の中で馬琴が欲していた『越後名寄』の中に引用された。その『越後名寄』について馬琴は書簡中で次のように言っている。

先達而御惠被下候御著書越後名よせ初編并略図之内少々訛謬有之よしにて御示し被下、委細致承知候。著述ハとかく誤りあるものにてゆめく御不穿鑿故とハ不奉存候。拙者なといつもセハしく著述致候故、多く後悔のミに候。既に放言初編ニも誤字或は点のつけちかひなど、清書之節にあやまられ候も不殘追々見出し後悔いたし候。いさゝかのあやまりヲとやかく難し候は著述をせぬ人のさかしらにて、作者の苦心をしらぬ故也。書の巧拙ハその作者の事業にある事ニて少々のあやまりハありともふかく咎ムへき事にあらずと存候。但此度ハ教諭にて発明いたし候。地理ハ他郷の人のしらぬ事なれども、その地の人ハ小兒もあやまりを難し申候半敷。其よし後編に補正被成候ハ、子細も無之事ながら右図并書とも御地頭より絶版被仰付候よし、尤遺憾の事ニ候。御苦心あだになり候事、いかゞのわけ合に候哉。(越後小泉蒼軒宛馬琴書簡五通) 四三頁 文政二年八月廿八日)

この馬琴の記によれば、『越後名寄』は後に絶版となった。それについて

馬琴は作者と読者の見解の相違を説き、最後に絶版となったことに同情を寄せている。この記事について市島春城氏は「馬琴と北越雷譜」の中で次のように述べられている。

其明(論者注：蒼軒の誤り。以下同じ)の著した地図が絶版に厄に遇つたことに就て、馬琴は次ぎの手紙で頗る同情を寄せてゐるが、僅かの訛謬の爲めに絶版を命ぜられた譯ではなく、寧ろ其明の圖が餘りに精細であつた爲めに却つて忌まれたのである。當時、地圖や地理書で、精細である爲めに絶版された例はいくつもある。馬琴はそれに氣がつかなかつたのである。

※『春城漫筆』「訪書餘談」馬琴と北越雷譜(二二二頁)

『越後名寄』が絶版になったのは、その中に収められている其明の「越後地図」があまりにも精細であつたからであると市島氏は見ている。確かに当時の地誌に対する規制については、山東京山も牧之宛の書簡の中で、

縮の条に、村の員数たしかに記すはあしからんと機山翁の説、感伏仕候。右あまたの村々とばかりに一直すべしこれらは公朝にかかり候事心すべきの第一なり。(鈴木牧之資料集) 二二二頁)

と牧之を諷めている。当時は、地方の行政に関わるようなことを詳しく書いた書物は御法度であった。蒼軒から馬琴に送った書簡は残されていないために、蒼軒自身、地図が絶版になったことについて、どのように言ってきたかは分からない。だが、市島氏の解釈を信じるならば、この事実は其明の地図がそれほど正確、精細なものであることを裏付けており、馬琴はその才能を買っていたのである。

さらに、蒼軒から送られてくる資料の正確さ、信頼性を裏付ける文面が蒼軒宛書簡天保元年二月二十一日の記に見られる。そこでは、「もし、御大地震の図説御写させ御恵ミ被下候ハ」と三条大地震の記を頼んでいるのである。この「地震の記」は『馬琴日記』<sup>※10</sup>文政十二年正月廿八日の記によると、「越後塩沢すゞ木牧之より旧冬指越候越後地震之書」と牧之からも送ってもらっている。しかもこの牧之から送ってもらった「越後地震之書」を馬琴は自ら写し、数人の知人に貸してさえる。にもかかわらず馬琴は、蒼軒に「地震の記」をあらためて頼んでいるのである。このことから、馬琴は牧之から送られてくる資料に対して、不安感を持っていたということが分かる。牧之からも「地震の記」をもらっていたが、それだけでは不安で、正誤を確かめるために蒼軒にも依頼した。小泉親子の絵図はそれほど正確であり、馬琴は大いにその資料を信頼し、逆に牧之の資料に対しては不安感を抱いていたのである。

## 結

以上のように、馬琴が雪譜を著述できなかったのは、牧之の資料に誤り、不足が多く、馬琴の完璧主義、考証癖も手伝って、その校正に手間取ったからである。その間には、馬琴が蒼軒に協力を求めることが何度もあったと思われ、その書簡のやりとりだけでも大変な苦労があったのであろう。

馬琴が雪譜出版に取りかからなかった理由としては他にも、馬琴自身の著述の繁忙や、家庭内の問題もあると言われているが、そのような問題があったとしても、牧之からの資料がしっかりしたものであれば、すぐにも出版に向けて動けたはずである。結局、手を入れなければならぬところが多く、越後と江戸という連絡するには不便な環境であったこともあり、先延ばしになっていたと考えられる。牧之の本業は作家ではなく、出版に関しては素人であるので仕方のないところはあるが、それを甘く見なかったところに馬琴の雪譜に対する姿勢も見られるのである。

また、違った視点から見れば、馬琴にとって生涯を掛けた大切な作品に、牧之の資料が載せられるというのは、それだけ資料としての価値が高いと馬琴に認められていたからであろう。それで、馬琴は、牧之の資料についても積極的に考証していたと考えられる。

(注)

- ※1 高橋実 越書房 一九八一
- ※2 『近世文芸』第三十三号(一九八〇)所収
- ※3 新潟県教育委員会編 一九九〇
- ※4 天理図書館善本叢書和書之部編集委員会編 八木書店 一九八〇
- ※5 『鈴木牧之資料集』一三六頁
- ※6 『鈴木牧之資料集』一三六頁
- ※7 『鈴木牧之資料集』一四九頁
- ※8 『鈴木牧之資料集』一三五頁
- ※9 一九二九
- ※10 『馬琴日記』第二卷 中央公論社 一九七四

(いがらし さだはる 長野清泉女学院高等学校)